

TITLE

1
JAN. 12
タイ
定価 58

厳選デザイン・カー&時計&ギフト



CARS in GOOD SHAPE
デザインマニアな
クルマ選び。

WELCOME TO
TOYOTA
アルファード・カス



意の中をハビタット
だという東西、右に
り置かれた白い車は
家にまわし、空のバ
ーを運びとつない
ぶに動きつづけたという。



イタリア最南端のシチリア島、地中海に浮かぶエオリイ諸島がぼんやり見える海沿いの国道を2時間走って通り過ぎたのは、メッシーナ近郊のサンタガタ市。女性の聖者の名前のついたこの静かな街のガレージに、きれいに修理された新たに塗装された真っ白なルノーR4（キャトル）が主人の帰郷を待っている。

その持ち主は、小説家のような風貌のジョバンニ・レバンティ氏。カッシーナやバルツコ、カンベッジなどの一流家具メーカーで毎年新作を発表しているイタリアデザイン界の注目株だ。凱歌のデザインナーという華やかな職業とは異様に、都会のパーティーで見かけるような華やかさでカクテルを飲んでいる異型的な業界人のイメージからはかけ離れた、物静かで知的な人物でもある。

「このキャトルを購入したのは85年だから、かれこれ20年のつきあいになるね。欧州統合以降の環境法の制定で古いクルマは走れなくなっってしまったから廃車にした方がいいんだ



Giovanni Levanti

ジョバンニ・レバンティ

インテスナリアルデザイン（1956年、イタリア・トリノ生まれ、トリノ工科大学建築学専攻、名建築師Cronache（クロネチエ））、イタリアのConsadnatica（ドモディナ）社から建築、家具の仕事を覚えることによって、室内設計がその地に着く。

けど、どうしてもできなかった。思い出が次山ありすぎてね。何しろ自分で持った初めてのクルマなんだ。いろいろ悩んだ末、この夏にミラノから僕の故郷のこままで最後の長旅をさせて、きれいに修理してガレージに残しておくことにしたのさ。パカンスの間に使えるようにね」

このクルマの四角くて車高が高く、いかにも遅い走りしかできないような、おっとりとした印象が好きなのだという。

「キャトルを持っていて人と話をすると、走っていて体験したエピソードやクルマとの思い出話が不思議と出てくるんだ。乗っているとまるで部屋の中にいるような。ハビタット（住環境）のようなものをこのクルマは感じさせてくれる。キャトルを選んだ人はクルマを選んだのではなくて、もう一つ住む部屋を選んだような感覚なんじゃないのかな。生活空間の中で使うものをデザインする僕にとつて、この空間は時に創造力を刺激してくれたりするんだ。キャトルはもとともと、フランスの農民や配管工やらが荷物を次山積めるようにダッシュボードの下にも広い空間が確保され、今じゃ当たり前の後部座席が取り外せる設計がされているんだけど、用途に応じる実用性と空間を変えられるというある種のあいまいさを感じられるなんて、僕には素晴らしいデザインに思えるんだ。今のところ、新しいクルマを買う予定はないね。キャトルとはかなり時間的なギャップのある、新しいモデルで自分に合うクルマが見つけれられるかどうか、阿たか自信がないんだ（笑）。今のクルマはどれも機械弄る印象のものが多いからね」

レバンティ氏は言葉を減らさように話しながら、ゆっくりと道中をドライブしてくれた。シチリアに吹く、やさしい風に、キャトルの速度がぴったりマッチしているのだった。